

常楽寺第55世半田孝海没後50年企画展

仏道に生き、学びと芸術を愛し、デモクラシーと反核平和を貫いた生涯

慈眼

視衆生

半田孝海筆「慈眼視衆生」



第2回原水爆禁止世界大会議長あいさつ(1956年長崎)



神津港人「嵐」1922年帝展出品



倉田白羊「琉球香炉」1935年春陽会展出品



山口蓬春「秋二題」1924年帝展出品

- [講演会] 「反核平和運動に捧げた半生—半田孝海の生涯—」
- [と き] 10月5日(土) 午後1時半～3時
- [講 師] 富田隆順さん(上田小県近現代史研究会)
- [参加費] 1,000円(定員50名、郵便・FAX・メールにてお申込ください)

8月1日(木)～12月25日(水)

令和6年

開館 午前9時～午後4時

常楽寺美術館

〒386-1431 上田市別所温泉 2347 TEL0268(37)1234 FAX0268(38)8545 Eメール kitamuki33@gmail.com

入館料: 大人500円、高専大生300円、小中生100円、身体障害者350円、団体30名以上1割引

後援: 上田市、上田市教育委員会、別所温泉観光協会、株式会社上田ケーブルビジョン、上田電鉄株式会社、週間上田新聞社、信州民報社、東信ジャーナル社

協力: 原水爆禁止長野県協議会(原水協)、上田小県近現代史研究会、上田日中友好協会



主な展示作品・資料の御案内

- ・「瓦礫放光 (がれきはひかりをはなつ)」石田茂作・孝海収集の古瓦
- ・「^{インド}印度童話集」[1929(昭和4)年アルス書房刊] ^{たかくらでる}高倉輝著・^{くら たはくよう}倉田白羊挿画
- ・「崖を負う家」倉田白羊 1928(昭和3)年
- ・「琉球の香炉」倉田白羊 1935(昭和10)年
- ・「^{きゆうゆうしよ がふく}舊友書画幅」倉田白羊・^{もり たつねとも}森田恒友・^{やま もとかなえ}山本鼎・^{こすぎ ほうあん}小杉放庵 1954(昭和29)年
- ・「アルプスの初夏」山本鼎
- ・「すみだ川」^{きむら そうはち}木村 荘八
- ・「獅子のカタネット」^{はな やぎしょう た ろう}花柳章太郎
- ・新聞小説「海軍」挿画 ^{なかむら なおんど}中村直人 1942(昭和17)年
- ・^{きたはら はくしゅう}北原白秋原稿 北原白秋 1923(大正12)年
- ・「秋二題」^{やまぐち ほうしゆん}山口蓬春 1924(大正13)年
- ・「常楽寺縁起 (鬼女紅葉伝説)」^{あらい かんぼう}荒井寛方 1937(昭和12)年
- ・「^{こがらし}凧」^{こうづ こうじん}神津港人 1922(大正11)年
- ・「^{じげん ししゅじょう}慈眼視衆生」半田孝海
- ・「原水爆禁止長野県協議会看板」半田孝海揮毫
- ・半田孝淳宛書簡 ^{ちようぼくしよ}趙撲初 1978年
- ・「^{だいまいようこくし とうめい の いっせつ}大明国師塔銘之一節 (信州の学海)」半田孝海 1965(昭和40)年

半田孝海略歴

半田孝海は、1887(明治19)年水戸市に生まれ、1896年常楽寺半田義海の養子となる。1911年東京帝国大学を卒業し、1917(大正6)年常楽寺第55世住職に就く。孝海は、1922年から常楽寺で、女性教育の先鞭ともいえる信州婦人夏期大学長を務めて、市川房枝らと出会う。また、1923年には別所で高倉輝と交遊する。こうしたなかで革新的な運動を展開し、多くの芸術家との交流もあった。

僧侶としても、1929(昭和4)に天台宗教学部長、1945年に善光寺大勧進副住職など要職を歴任する。しかし、大戦のさなか、自らが仏教徒として「^{ふ せつしやう}不殺生」を体現できなかったことを激しく悔やむ。1953年、^{ふりよじゆんなんしや いれい}中国人浮屠殉難者慰霊実行委員長に就任、大戦中に日本に強制連行され、亡くなった中国人捕虜の遺骨を故国に送り還す事業に着手する。さらに、1954年のビキニ環礁沖での被爆事件に端を発した原水爆禁止運動は、その後の孝海の半生を決定づけた。

孝海は同年、原水爆禁止の旗を掲げて善光寺の門前で平和行進を行い、原水爆禁止長野県協議会も立ち上げ、1955年第1回原水爆禁止世界大会以来議長に就任、世界に核兵器廃絶を訴えた。併行して、中国人捕虜の遺骨送還のために1958年訪中、長野県日中友好協会を設立、初代会長も務めた。1964年の訪中では、^{しゅうおんらい}周恩来首相ら中国の政府首脳と会見する。

孝海は、1974年9月17日に示寂するまで世界の平和を願い続けた。生涯を通じて、女性・青年の学習運動や、日中友好、原水禁運動など、平和と人権を希求したその遺志は、半田孝淳(256世天台座主)に伝えられた。孝海が孝淳や未来に託した願いは、没後50年を経たいまも安寧を迎えない世界のなかで、いっそう輝いている。



1960年市川房枝と常楽寺にて



1954年善光寺に原水協の看板を掲げる

※企画展タイトル「慈眼視衆生」は法華經に出てくる観音の眼のことです。観音の眼は、半分開いて半分は閉じている。開いた半分は慈悲の眼で、閉じた半分は常に内省している眼です。孝海は、慈しみの半眼と、自己反省の半眼で人生を実践しました。